エンドレス転生

今ダ　果枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドレス転生

【Ｎコード】

Ｎ３９５５Ｚ

【作者名】

今ダ　果枯

【あらすじ】

とある少年と神様が絡む物語。

やばい死ねる。

もともと勇者だからって四十歳のおっさんを一人、敵軍の真っ只中に置き去りにするなんておかしいだろ！

まぁ、分かってはいるんだが、要するに国に奴ら俺を厄介払いしたわけだ。二十年前まで絶頂期の勇者だったし、魔王も倒した、まぁ使命感でだけど。魔王が美女だったのは驚いたけど、まぁそういうこともあるかなって思えたし、これで世界が平和になるならしかたないって思った。

世界は平和にはならなかった訳だけど。

魔王が死んで魔族が死ぬと今度は人間同士が争いだした。村と村が、町と町が、国と国が。力、土地、奴隷、を求めて争うことになった。魔族に勝って、高慢に傲慢になった人間の欲が争いを生んだ。

すると俺は逆に国から邪魔になった。

勇者という強すぎる力は他国から目を付けられるのに十分な理由になった。

一国を滅ぼすには弱すぎる。結局、勇者と言えど個人。国を滅ぼすほどがあれば重宝がられただろう。

それにしたって馬鹿な選択だろう、的にされたくないから勇者を切り捨てるなんて。されども、その馬鹿な選択にはめられてもう俺は死のうとしているのだが。

「ちくしょう、アリス、帰れそうにないなぁ」

ゴフッ

槍が胸を貫く。「勇者とったどぉぉぉ」などと一人の兵士が声を上げる。続けて、ざくっざくっ、槍が体を貫く。

「エコ、エコッ！」

地面に手をつき使い魔を呼ぶ。

「ご主人様！」

白黒の水玉模様の猫が影から現れる。

「俺は、長くない、アリスを、アリスを頼む！」

エコは目いっぱいに涙を溜め、それでもしっかりと頷く。

「アリスの母はもうこの世にいないから。父の俺が死んでしまえば一人になる、一緒にいてやってくれ、エコ、行け！」

エコは何度も頷いた後、影を潜り抜け。アリスのもとに向かう。

これでもう思い残すこともない。目をつむりアリスと妻の顔を思い出す。

もっと長く生きたかった。

できれば、アリスのお嫁姿も見たかった。

こんな戦場で死にたくなかった。でも仕方ない。

最後の魔力を振り絞った。

今日も空は青かった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「やぁ、また死んじゃったねぇ」
目が覚めると、目の前にスーツを着た目の細い金髪碧眼の男が立っていた。

はぁ。
「今回もだめだったよぉ、ってか？」
肩をすくめて、軽く笑ってみせる。
「あはは、それもう古いよ」
目の細い男も笑い返す。
体を起こし何度か足踏みをし肩をまわしてみる。
「どうだい？」
「うん、問題ないよ」
まぁ、問題あったことなんて一度もないのだが。

隣の部屋に行くとコーヒーが用意してあった
腰を掛ける。
真っ白な部屋。家具も家電もその他もろもろも全て真っ白ででき

ている。
ランプはともかく、冷蔵庫なんて「あの世界」には無かった。
まぁ、ここは要するに死後の世界である。
厳密には違うにだが。
「今回の徳はどうだった？」
自慢の黒髪をイジリながら、目の細い男、要するに神（厳密には違う存在）に問いかける。
「以前として高水準だよ。いやぁ、君は僕の自慢だよ」
ニコニコと喜色満面の笑みを浮かべる神、反対に僕はこめかみを押さえるしぐさをとって溜め息を吐く。
「イリア、ラスク！」
「はいっ！ユウ様ここに！」
ラスクをほおばる。
「どうでしょう？ユウ様」
メイド服をきた女性、イリアは不安そうにたずねてくる。ここで意地悪して「不味い！」とでも言えばイリアはココを首になるのだろうなと想像する。
ココに来る前は冥土でメイドをやったいたとか何とか。
「うん、おいしいよ。美人に甘いお菓子、君は僕の癒しだよ」
コーヒーを飲みつつ素直な感想を答える。
「そんな、照れます」
イリアは頬に手を当てて身をくねらせている。
僕と神は面白いものを見るぐらいのニュアンスの入った視線でイリアを見物する。

「おい、神、僕はいつになったら死ねるんだ」
半ばあきらめの入った態度で問いかけてみる。
「当分先だろうねぇ、あはは、まぁ正確にはもう死んでいるのだけど」
「うるさい、そんなことは分かってるよ」
はあ。
「僕、次の転生で何回目だ」
「えーと、１９２５回目になるねぇ、ほかの転生者の中でもだんとつだよ」
１９２５回、ありとあらゆる世界で、生まれ、育ち、恋に落ちて、結婚し、子を残し、死んだ。
それを繰り返してきた訳だ。

「今回は何で徳を得ることになったんだ？」
「うーん、まぁ数え切れない程あるけどねぇ、大きいので言えば、国家間の同盟の設立、霧の谷の地図の作成、東の魔女と人間の和解への手助け、魔王討伐による一時的平和、最後に娘アリスへの使い魔の譲渡と魔力をふりしぼった最後の広域無差別治癒魔法だねぇ」
「なんで、最後ので徳を得ることになるんだよ？」
「君が死んだ後、君の娘と戦場にいた兵士たちがどの国にも属さない庸兵団みたいなものを作ることになるんだけどねぇ、最初は小さな庸兵団だったんだけど、まぁ結果として戦争を百年ぐらい縮めて文明の進歩にも大きく貢献し世界の英雄として多くの人間、魔族から信仰されることになるんだよねぇ」
ニコニコしながら神は語る、くそっ余計なことをした。
「仕方ないですよ、ユウ様、転生すればここでの記憶や異世界の記憶はこちらでお預かりする決まりになっていますから、ユウ様は自分の魂に従って自分にとって最善の行動をとったまでです」
「はぁ、僕がいい奴すぎたから」

「あはは、最後のは広範囲の無差別怨念呪術に失敗しただけだろ」
「ほっとけ、イリア、バームクーヘン」
「はい、ユウ様」

バームクーヘンをもしゃもしゃとほおばる
「はぁ、そもそも善行を行えば徳が貯まるって制度が何とかならないのか？」
「無理だねぇ、制度と言うよりはもはやシステムとか法則に近いものだからねぇ。あとねぇ、ユウ、徳は」
「分かってるよ！徳は善行で貯まるものじゃないって言いたいんだろ」
「そう、徳が与えられるのは世界に貢献したときだよ」
「そうじゃなきゃ、キリクなんてとっくの昔に地獄の業火にでも焼かれて死んでるはずだもんな」
「まぁ、あれは生粋のテロリストだからねぇ、なんであんな毎度毎度、転生するごとに記憶も無いのにテロだの殺人だのできるのか不思議なぐらいだよ」
「そういう魂なんだろ」
「だろうねぇ」
「マオはどうなんだ？」
「あぁ、あれは２０年前に死んでまた転生していったよ」
「２０年前？まさか」
「うん、ユウにぶっ殺されたぁって怒ってたよ。マオちゃん可愛かったなぁ」
「マオだけに魔王だった、ってか？」
神は呆れた表情を作りイリアがクスクスと後ろで笑っている。
「まぁ、彼女が悪役って言うのも珍しいんだけどねぇ」
「さて、無駄にぺちゃくちゃしてる暇は無いからねぇ、さっさと転

生してもらおう。何か希望はあるかい？」
「んー」
「異世界トリップなんてどうだい？」
「なんだそれ？」
「まず、始めに君は普通平凡な世界の子として生まれるんだけど、ある日何かをきっかけに突然君は剣と魔法の世界に迷い込むってジャンルさ！」
「へー、大好きなネット小説ってやつの知識か？」
「そう」
「こんど死んだ時に読ましてくれよ」
「そんな暇ないと思うけどねぇ」
「僕ってそんな忙しいのか？」
「そりゃ引張りだこさ、１０００回も転生している人間なんて君しかいないからねぇ」
「へーそうなのか」
「はい、ユウ様の人気はメイドたちの中でも相当なものですよ」
「ハーレムとかつくれるぐらい？」
いたずらっぽく質問してみる。
「そんなこと余裕のよっちゃんですよ」
イリアは「えっへん」と胸を張る。一目見ただけなら大人っぽい落ち着いたメイドさんなのになぁ。
まぁこれはこれで可愛いのだけど。

「そうだ、次に転生する世界は剣と魔法のない平和な世界がいいなぁ」
「それは難しいねぇ」
「何で？」
「約８００京ある世界で魔法や超能力とか呪術や気がない世界なんて２パーセントくらいしかないんじゃないかなぁ」
「それは神様がユウ様のために頑張ればいいじゃないですか」

「イリア！君はどっちの味方なんだい？」
「ユウ様に決まってるじゃないですか！」
僕を横目にああだこうだと口喧嘩を始める神様とイリア。
やれやれだぜ。

「じゃあ、神様、僕は行って来るからね」
ゲームをリセットするぐらいの軽い気持ちで『転生の門』をくぐる。

そしてまた僕は産声を上げる。

（後書き）

初投稿です

面白かったでしょうか？

楽しく読んでいただけたなら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3955z/

エンドレス転生

2011年12月16日23時50分発行